

# 社交不安傾向者の表情に対する視線追跡の特徴

○河原剛<sup>1</sup>・井佐藤裕<sup>2</sup>・井境泉洋<sup>3</sup>

(1 広島大学大学院教育学研究科・2 徳島大学大学院社会産業理工学研究部・3 宮崎大学教育学部)

## 目的

社交不安症 (Social Anxiety Disorder : SAD) は、他者からの注目を浴びる可能性のある社交場面に対する著しい恐怖、不安を特徴とする精神疾患である (APA, 2013)。Horley et al. (2003) は、社交不安者は怒り表情の眼に対する注視の回数が少なく、眼を脅威刺激として認知することを示唆している。しかし、本邦における社交不安者の表情に対する視線追跡の特徴は未だ明らかになっていない。したがって、本研究では、探索的な研究として社交不安傾向者を対象として視線計測の実験を行う。

## 方法

**実験参加者**：事前質問紙調査において、BFNE 得点が上位 25% (47 点以上) の社交不安高群、下位 25% (36 点以下) の社交不安低群を実験参加者とし、分析の対象となったのは社交不安高群 10 名 (男性 3 名、女性 7 名、平均年齢  $20.00 \pm 1.05$  歳) と社交不安低群 6 名 (男性 1 名、女性 5 名、平均年齢  $20.33 \pm 1.03$  歳) であった。

**実験装置**：実験には、Tobii 1750 を用いた。ディスプレイ解像度は  $1024 \times 768$  [pixels] であった。課題の作成、データの記録には、ClearView 2.5.1 (Tobii Technology) を用いた。ディスプレイと実験参加者の距離は 50 cm とした。

**刺激材料**：先行刺激として、ATR 顔表情データベース (DB99) を用いた。モデル男女 1 名ずつの怒り表情 2 種、喜び表情 2 種、中性表情 2 種の計 6 枚を表情刺激として使用する。表情刺激のサイズは、 $640 \times 486$  [pixels] とした。

**課題**：画面中央に十字型の注視点が 500 ms 表示され、その直後に注視点の位置に怒り表情、喜び表情、中性表情がランダムに提示される。先行刺激は 1000 ms 提示される。怒り表情 6 回、喜び表情 6 回、中性表情 6 回の計 18 試行を行った。

## 結果

社交不安低群においては、眼を中心に視線が分布している。さらに、男性・女性の怒り表情以外の表情においては、男性の表情で額周辺、女性の表情で髪飾りといった部分へ視線が分布していた。一方、社交不安高群においては、社交不安低群と比較して、男性・女性の怒り表情、男性の喜び表情、女性の中性表情において眼よりも鼻といった、眼周辺下部に視線が分布していることが分かる。しかし、女性の喜び表情、男性の中性表情では、社交不安低群と同じように眼を中心に視線が分布していた。

## 考察

Horley et al. (2003) の研究結果と同様に、社交不安傾向者において怒り表情の眼への注視を回避する傾向が見られた。異なる結果として、男性の喜び表情、女性の中性表情でも眼の注視を回避する傾向が見られたことである。

この結果から、日本人における社交不安傾向者の傾向である可能性が示唆された。ただし、本研究の参加者には女性が多く、性差の影響を考慮すべきである。今後の研究ではサンプルサイズを増やすといった、さらなる検討を行っていく必要であろう。

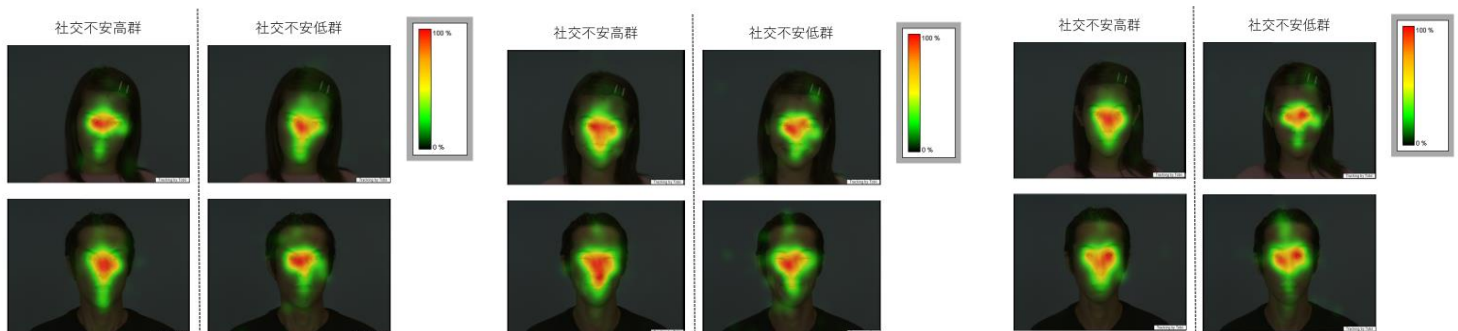


Figure 1 怒り表情 (上: 女性, 下: 男性) のヒートマップ

Figure 2 喜び表情 (上: 女性, 下: 男性) のヒートマップ

Figure 3 中性表情 (上: 女性, 下: 男性) のヒートマップ